

## 日本人の稲作文化に合わせた 4 月会計年度と新たな旅立ちという意味の卒業

### 1 仰げば尊し

仰げば 尊し 我が師の恩  
教（おしえ）の庭にも はや幾年（いくとせ）  
思えば いと疾（と）し この年月（としつき）  
今こそ 別れめ いざさらば

『仰げば尊し』（あおげばとうとし）の一番の歌詞ですね。毎年この時期、卒業式になると歌われる歌です。

この曲は、作者不詳であり、様々な説があります。スコットランド民謡や伊沢修二、またはアメリカで発売された「Song for the Close of School」という曲が原曲ではないかとも言われています。一方、この曲の卒業式でよく歌われるようになった日本語の作詞は、大槻文彦・里見義・加部巖夫の合議によって作られたと言われています。1884 年（明治 17 年）発行の『小学唱歌集』第 3 編より収録されたのが、唱歌としての始まりです。

もう一度、今度は現代語に訳して意味を入れて、三番まで書いてみましょう。

#### ①

仰げば尊し 我が師の恩	* 見上げ見るほど尊きは 私の師への恩
教えの庭にも はや幾年	* この学びやにきて もう幾年もたった
思えばいと疾し この年月	* 思い起こせばとても早くかんじた この年月よ
今こそ別れめ いざさらば	* 今、お別れ申し さようなら

#### ②

互いに睦し 日頃の恩	* 互いに仲の良かった（友の） 日ごろの恩
別れる後にも やよ忘るな	* 別れたあとも わすれてはいけない
身を立て名をあげ やよ励めよ	* 身をたて、名をあげ なおもそれに励め
今こそ別れめ いざさらば	* 今、お別れ申し さようなら

#### ③

朝夕馴れにし 学びの窓	* 朝、夕ともにし慣れ親しんだ 校舎
蛍のともしび 積む白雪	* 蛍のともしび 白雪のように積もってゆく
忘るる間ぞなき ゆく年月	* 忘れることなどないだらう 過ぎし日々

今こそ別れめ いざさらば

\*今、お別れ申し さようなら

言葉の意味を知ると、非常に良い歌ですね。この歌は、この歌詞によって、明治から大正、昭和にかけて、学校の卒業式でしばしば歌われる定番の曲となっていました。しかし、最近では歌詞が文語であるため、児童・生徒には分かりにくいという理由や、あるいは歌詞の中において生徒が教師に対して尊敬することを強要している等、様々なことと言われるようになってしまい、なかなか歌われることが少なくなってしまいました。現代の社会は、かえって複雑で、教えてくれた先生と教えを受けた生徒が平等であるというような感覚を強要し、必要以上の平等の意識になってしまい、逆に日本の心の美しさや、道徳心といわれるような内容を失ってきてしまっているのかもしれない。

## 2 日本の教育史

突然「仰げば尊し」の歌詞から入りました。今回は、卒業と新学期、または新年度ということに関して勉強してみたいと思います。しかし、「卒業」というのは、学業ができてからの話になるので、今回はあまり昔のこと、平安時代の伝統などには話がいかないかもしれません。それでも、まずは日本の学校制度について少し見てゆきましょう。

日本史上最も早く教育に関心を示したといわれるのは、聖徳太子です。聖徳太子は經典を研究し「三経義疏」という注釈書を書いています。この中に、すべての人に等しく教育を説き、理想の実現と人間平等の考え方といわれる「一乗思想」が書かれているとされています。また、その教育に関して中国から学ぶという「留学制度」、要するに、遣隋使を作ったのも聖徳太子です。

その後、大宝律令で学問の機関は制度化され、律令官制の中に「大学寮」が設置されるようになります。この大学寮は、式部省の所管で、明経道（経書）、算道（算術）および副教科の音道（中国語の発音）、書道（書き方）の四学科があり、後に紀伝道（通称「文章道」、中国史・文章）と明法道（法律）が加わり、全寮制で全国の優秀な人を学ばせる場所となりました。ちなみに、これらの「明」は、それについて「明るい」（ことの次第によく通じた）という意味ですから、その道の専門家を作ることになりますね。今の大学という言葉の原点がこの言葉になります。それ以上の専門的な技術者養成機関としては典薬寮、陰陽寮、雅楽寮などがありました。これらでは医、薬、針、按摩、陰陽、天文占術、暦、雅楽などが学ばれたといえます。この大学寮で学び、人臣を極めたので最も有名な人が菅原道真です。大学寮で学べる学問をおさめ左大臣になりますが、後に嫉妬から讒言で左遷されてしまいます。左遷されて亡くなってしまったので怨霊となってしまいますが、天皇が謝罪しそして祀ったので、その後「天満宮」として書道の神様そして学問の神様として知られるようになります。今でも、受験生や学業成就の神様といえば天満宮ですね。

鎌倉時代以降も、この大学寮は続きますが、武士の子供たちが京都で全寮制で学ぶとい

うのはなかなか難しいことです。そのために、鎌倉五山や京都五山の禅寺などが中心になり、寺で学ぶような形になります。この制度が、江戸時代になり、一般の子供たちにも「読み・書き・そろばん」を教えるようになったのが「寺子屋」です。寺子屋は、論語などを題材に、文字の読み書きを学び、または簡単な計算を学ぶようになったのです。一方、一般や武士の大人たちはどうしたでしょうか。江戸時代になると儒学の聖地として「湯島聖堂」（旧昌平坂学問所）が作られ、また、各藩に藩校が作られます。水戸の講道館や会津の日新館などは幕末の志士を多く出したので有名ですね。また、有名な先生は自分たちで「私塾」を作り、そして生徒を集めて自分の専門の学問を教えていました。緒方洪庵の「適塾」などは有名ですし、またその子弟のつながりは強く「洗心塾」の大塩平八郎などはその門弟と一緒に乱を起こしているほどです。また私塾は外国人でも作ることができ、シーボルトの「鳴滝塾」などもありました。しかし、私塾で最も有名なのは、幕末の志士、そして明治の元勳の多くを輩出した吉田松陰の「松下村塾」ですね。

さて、寺子屋も、また藩校も私塾も、いずれも今の学校のように4月から始まり、3月に終わるというものではありませんでした。実際には、いつでも入学することができ、いつでも辞めることができるというようなシステムで、通っている間だけ月謝を払うという仕組みになっていました。当然に途中でほかの塾に行ったり、あるいは、他流試合のような問答を行ってみたりと、勉強の方法も時期もさまざまであったようです。また、一人の先生が教えてあとは皆生徒というのではなく、先輩が後輩を教えるというようなシステムであったために、いつから始めても落ちこぼれることはないというような感じではなかったのでしょうか。現在の学校制度よりも良いかもしれません。

これは、剣道などの師弟関係と同じ状態になっています。もともと武士の学問がお寺で行われたということでしたが、実際に、今でもお寺の講話などは、何回かのシリーズになっていたとしても、途中から参加も途中でやめてもうるさく言われません。お寺では「縁」ということを重要視するので、その「縁」ができたときにお寺の方から切ってしまうことはほとんどないのです。また、寺子屋になれば、子供が相手ですから、本来であれば一斉に始めて一斉に終わる方が良いのかもしれませんが、しかし、当時は子供といえども重要な働き手ですし、田植えや稲刈りの時期はそのような意識がなくても村総出で手伝うのが普通です。そのようなイベントがあるので、なかなか一斉教育というのはできず、いつでも入学ができ、また仕事が忙しくなったり、手に職をつけるための修業が必要になったりとなれば、当然に、学業を休ませなければならない場合があったのです。

### 3 細川幽斎の和歌を使った子供への教育

このように書くと、昔の日本人、特に一般の家庭はあまり教育に熱心ではなかったのかというような疑問が出てしまいます。しかし、そのようなものではありません。昔の人も教育には非常に熱心に取り組んでいました。

奈良時代、万葉集の中に山上憶良の歌の中に「貧窮問答歌」というものがあります。律令体制下の公民の貧窮ぶりと里長による苛酷な税の取り立ての様子を写實的に歌った歌といわれています。しかしこの中にも「我よりも 貧しき人の 父母は 飢え寒（こご）ゆらむ 妻子（めこ）どもは 乞ふ乞ふ泣くらむ このときは 如何にしつつか ながよはわたる」（訳文：私よりも貧しい人の父母は腹をすかせてこごえ、妻子は泣いているだろうに。こういう時はあなたはどのように暮らしているのか。）というように、自分の父母や子供のことを心配している言葉があります。日本の場合は、どのような貧困の状況の中においても、父母や子供のことを心配する親の姿が書かれています。当然に、古代の日本では、いや日本だけでなく世界中がそうだったと思いますが、親が子供に自分の知識や知恵を教え、そして、子供が将来の生活困らないようにしていたのです。

戦国時代には変わった教育方法を行っている人がいました。戦国大名でありながら、文化人として名高い細川幽斎です。

細川幽斎の子供は、細川ガラシャの夫で有名な細川忠興です。その忠興が子供の頃、父幽斎の言いつけを聞かずに困らせたことがあったそうです。その時に、普通の戦国大名ならば怒鳴ったり、大声で叱ったり、場合によっては体罰を加えるようなこともあったでしょう。しかし、細川幽斎は少し違いました。父幽斎は、忠興に対して手紙を書き、自分の元と呼んでそれを渡します。その紙には、簡単な訓戒と共に「いひ出し とりかへされぬものなれば 言の葉残せ 腹はたつとも」という和歌が書かれていました。私の言いつけを破ったことは取り返しのつかぬ事だから、このように言葉を残しておきますよ。腹は立つけど大きな声では叱りません、というような意味でしょうか。

忠興が家を継いでから、ある家臣から「忠興様は何事にも厳しすぎて、これではよくお仕えできませんぬ」という訴えがあったことがありました。幽斎は、その後しばらく忠興のやり方を見ていて、家臣の訴えも最もと思うところが多々あったようです。家臣に厳しいのは良いが、厳しすぎるのはかえって家臣の心が離れてしまうと思ったのでしょうか。また、子供の頃と同じで、紙に和歌をしたため、忠興に「歌の心をよく考えなさい」と言いながら渡します。「まこも草 つのぐみわたる 沢辺には つながぬ駒も はなれざりけり」（訳：真菰草が一面に角のような芽を出した沢辺に馬を放しても、馬はその場を逃げ去らない。そこには草があり、そこが居よい所であるからだなあ）という歌です。これは詞花和歌集の俊恵法師の和歌です。この歌によって、厳しくしたり綱でつながなくても、居心地がよく、そしてその場が好きならば家来は離れてゆきませんよ、ということを書き、厳しいだけの忠興の政治を戒めたのです。

戦国大名であった細川幽斎は、常に自分や先生が息子忠興の近くにおいて、物事を終えてあげられることではないということをよくわかっていました。そのために、何か親が子供に忠告をする時に、一方的に怒るのではなく、和歌を渡し、その和歌の内容を考えさせることによって、自分の頭で考えて物事を解決するということを習慣づかせたのではないのでしょうか。古い和歌から、その精神や心を学ばせ、その心で政治を行ったり、家臣に接し

たりさせたのです。家臣がしっかりしていれば、そして団結力があれば、当然に、軍も強くなりますね。そうやって人の心を学ばせ、自分で考えさせる道具として、古来から伝わる和歌を使ったのです。貧窮問答歌とは、少しレベルが違うかもしれませんが、父親が子供に対してしてあげられる、最善の方法で、ほかに講師を呼んだりせず、父親が父親の考え方で、子供に接するということが教育の基本であったのです。特に、「家」という考え方が日本の中には、強く残っていて、「家風」などもあったので、より一層集団教育よりも各家庭の子供への教育ということが重要だったのではないのでしょうか。

しかし、徐々に社会が広くなり、そして商業経済で貨幣と物流ができるようになってから、読み書きやそろばんができないと子供が困るようになります。自分の家のやり方だけで社会生活ができなくなるとは、生活ができなくなってしまうのです。そのような時代になって、初めて寺子屋が一般に普及するようになり、そして、武士も一般も含めて広く子供たちの「集団教育」が行われるようになるのです。

#### 4 卒業という意味

このように、日本の教育は、基本的には各家庭による父から子供への教育が基本であり、戦国大名の時代までそうであったということがわかります。そのようなところから考えれば、寺子屋なども「父親の教育」の延長線上でしかなく、当然にいつ入っても、いつ辞めてもよいということになります。そのために、「入学」「卒業」というものはあまりなかったようです。そのような言葉よりも、剣道の道場のように「免許皆伝」というような言い方になっていでしょうし、または落語のように「襲名」というような言い方になったのではないのでしょうか。商業的には「のれん分け」というのが、まさに現在でいう卒業と同じような形になるのではないかと思います。現在の大学の卒業なども、そのことによって「学士」や「博士」になるのですから「学士免許皆伝」とか「博士襲名」というような言い方にもなるのではないかと思います。

しかし、日本では明治になって学校制度を作り、その後「卒業」という単語を使うようになったのです。これはどうしてでしょうか。

そもそも、「卒業」とはいったいどういう意味でしょうか。

「卒」という漢字には、一番最初とか、最も下の階級という意味があります。あまり例は良くありませんが「卒中」というと、それまで元気であったのに、急変して死んでしまった場合などに使います。「卒爾」というのも、「突然に」とか「にわか」または「だしぬけに」というような意味があります。また、「一兵卒」などという、「最下級の兵士」という意味になります。大物政治家などが、自分もみんなと一緒に働くなどというときに「一兵卒として」などといって話題になったことがあるので、その印象が残っているのではないのでしょうか。

要するに、「卒」というのは「一つのものが終わり、変化して、次の段階の最も下の部分

に新たに入る」という意味があります。

一方「業」とは、「業績」とか「覇業」というような字から「苦勞して成し遂げる事柄」という意味があります。一方、そこまで行かなくてもその内容を毎日ということになれば「営業」とか「職業」などというような熟語から「生活のための仕事」というような意味があります。そこから派生して、今度は非常に大きな意味で、人がなぜ生まれてきて死ぬまでに何をしなければならぬのかというような意味からすると、「ゴウ」と読み方を変えて「報いを招く前世の行い」というような意味にも使われます。

いずれにせよ「業」とは、その人がなすべき役割、または成し遂げて習得すること、その仕事ということであるといえます。一人が何をなすのかということ、その与えられた課題をなすことではないでしょうか。

要するに「卒業」とは、「今の段階でなすべきことを終了し、そのうえで、次の段階の一番初めのスタートラインに立つ」ということを意味しています。卒業は、まさに、学校の終わりではなく、学校はその時になすべきことであって、次の段階に一步進み、そして「最も下の段階の新たなスタートラインに立つ」ということを意味しています。卒業というと「新たな旅立ち」などという歌がありますが、まさにそのような意味として「卒業」という言葉ができたのではないのでしょうか。

その意味で「免許皆伝」というのは、その時点で独立するという意味でその能力があるということに過ぎませんし、「のれん分け」とか「襲名」というのは、まさに古いものまたは本家の名前を引き継ぐ、名前を世襲するという意味であり、「完全に新しいスタートライン」ではありませんね。もちろん、卒業をしたからといって、過去の歴史がなくなってしまうわけではありません。しかし、そのことを活かしながら次の段階に進む。そのことを世襲するのではなく、自分の糧にして次のスタートを切るという意味で、「免許皆伝」とか「襲名」とは違う意味になるのではないのでしょうか。

## 5 「卒業」という言葉が使われたのはなぜか

では「卒業」というのは、いつから使われたのでしょうか。

寺子屋や私塾では使われてはいません。松下村塾などは塾生のまま明治維新に参加している人も少なくなかったのですから、卒業ということもなく、塾生のまま時代ごと新たな段階に踏み出してしまったという感じかもしれません。

明治時代になると西洋の教育が導入されるようになります。明治19年に政府の会計年度が4月始まりになります。それに合わせて小学校が4月入学になり、また軍隊の入隊届も4月になります。その後ほとんどの学校が4月スタートということになります。そして日本の高等教育である大学も、大正10年にすべての帝国大学が4月入学となり、現在に至っているのです。

学校は、「小学校」「中学校」「大学」というようになっていました。現在では中学と大学

の間に高等学校がありますね。いずれにせよ、一つの学校ですべての学業を終わらせるわけではありません。もちろん当時は設備の問題や、あるいは専門性の問題などもあって、学校を分けたのでしょう。そのために、小学校を卒業しても、その次の学校があります。

小学校を最高学年で卒業しても、次の中学校で必ず「1年生」まさに、「卒」から始まるのです。そして、その時なすべきこととは、現在では教育指導要領というもので細かくカリキュラムが決められていますが、その内容が終了したということになります。だから、「卒業証書」であったり、あるいは「修了証」というような言い方になったりします。

ではなぜ、「4月」始まり、要するに3月が卒業の時期なのでしょう。

今書いたように官公庁の会計年度が「4月に始まる」とされています。

財政法（昭和22年3月31日。最終改正：平成14年12月13日）

第十一条 国の会計年度は、毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終るものとする。

地方自治法（昭和22年4月17日。最終改正：平成18年12月22日）

第二百八条 普通地方公共団体の会計年度は、毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終るものとする。

というように、しっかりと法律に書いてあるのです。このために「義務教育」の学校が4月始まりになるのは、その会計年度に合わせたということになります。

では会計年度はなぜ4月始まりになったのでしょうか。

この理由には税金徴収の時期があります。かつての日本は、主たる産業が農業（主力は稲作）でしたから、政府が税金として徴収する主な財源も当然この農業に対して課税したものでした。

稲作の場合、その収穫時期はもっぱら秋。租税は物納ではなくお金で徴収しましたから、秋に収穫した米が現金化されてから徴収というのが一番無理のない姿になります。とすると、税金の徴収が一段落して、収入がハッキリした段階で、次の「一年」の予算を定めて実行に移すタイミングとしては、4月頃が都合がよいのです。

もう少し前でもよいのかもしれませんが、1月ですと年末年始の正月の内容があり、また、2月には節分などがあります。明治時代の初期はまだ太陽暦に変えた後遺症があり、多くの人が、古い暦と併用していました。そのために、2月の節分というのはなかなか定着しなく、2月のはじめというよりは、太陰暦の節分を考えて日数が変わっていたような感じもあったようですね。

逆に、次の田畑の準備をするのは4月からでそこが終わると徐々に田植えが始まります。稲作のはじめという意味では、今年度の仕事はじめが、4月からというのが良かったということになります。まさに、前年度の米がお金に変わり、そして次の稲作が始まる時期の、その月の初めを会計年度の初めにしたので。

そして、学校もそれに合わせた方が、一年を感じやすく、また「春」まさに、様々な植

物が目を出す時期から「新たな旅立ち」ができるということになります。そのような心理的なことも含めて、この時期が会計年度、そして、春に卒業と新学期ができたのではないのでしょうか。

現在、欧米に合わせて9月始まりにする大学ということが検討されています。もちろん、海外との関係や留学などの関係を考えれば、そのような利便性も必要かもしれません。しかし、日本には日本の稲作文化から出てくる、このような「新たな季節の始まり」ということが良いのかもしれません。そのような日本の文化的、または日本の伝統などを加味したこのような制度とうまく適合するような制度も検討してもらいたいと思いますね。